調査研究報告書

中山道上州路の庶民信仰と地域社会

―有形民俗資料をとおしてみた地域社会における生活文化の研究―

研究代表者　谷　沢　　明（愛知淑徳大学教授）

一九九六年（平成八年）九月刊

財団法人 地域社会研究所
放送大学地域社会研究会

調査研究の概要

この研究はフィールドワークを主体として、地域社会における生活文化を、有形民俗資料の調査をとおして明らかにすることを目的としている。今日、地域社会における人びとの交流のあり方を考えるにあたり、伝統的な生活文化がどのように受け継がれ、また変容したかは、重要な課題のひとつと思われる。地域社会における住民の結束は、これまで、その地に存在する伝統的な「講」を中心に図られてきたことをあげることができよう。本研究においては、とりわけ「講」の実態などについて、有形民俗資料をとおして、実証的に明らかにしていくことを試みた。

本研究のフィールドは、近世五街道のひとつとして整備された中山道上州路（群馬県新町宿から碓氷峠まで）を対象としている。街道沿いの宿場町や村を『中仙道分間延絵図』で調べ、『角川地名大辞典』（角川書店発行）によって、その宿場町や村にある神社仏閣を調べた。また、『歴史の道調査報告書　中山道』（群馬県教育委員会発行）に記載してある社寺なども調査対象とした。この歴史的な街道沿いには、さまざまな有形民俗資料が残存している。本研究においてはとくに、神社仏閣や小祠などに寄進された各種奉納物および辻や村境に存在する石塔類に視点をあてて、その銘文を記録し、形態を描写する作業を重点的に行った。そして、それらの生活文化財がどのような地域住民により生み出されたか、またそれら諸資料の存在意味を地域住民の結束のあり方などとの関係のもとで探っていきたい、と意図した。

調査研究方法としては、中山道上州路沿いに点在する神社仏閣や小祠、路傍の石塔類の悉皆調査をおこなった。テーマは、地蔵菩薩、観音菩薩、馬頭観音、庚申塔、念仏塔、二十二夜塔、二十三夜塔、道祖神、道標、橋供養塔、巡拝供養塔、経典供養塔、聖徳太子塔、蚕神塔、山岳信仰塔である。調査対象地域は、テーマにより多少異なっているが、中山道からおおきくはずれてはいない。

調査は、平成四年十月二十九日から平成八年七月二十五日までである。調査日は延べ二百五十日あまりを数える。詳しくは巻末の調査日誌にしるしてあるので参照されたい。調査した神社仏閣は百六十四か所、路傍と塚は七十七か所である。また、中山道から少しはずれるが、十五か所の社寺も関連調査した。

なお、本調査にあたり、銘文の記録は放送大学地域社会研究会が、形態の描写は武蔵野美術大学学生が担当した。

調査研究にあたった会員はつぎのとおりである。